

20. ^{131}I - β_2 -microglobulin による透析アミロイドーシスのイメージング

清田 敦彦 杉村 武嗣 山上 征二
 岸本 武利 (大阪市大・泌)
 岡村 光英 小橋 肇子 牛嶋 陽
 小田 淳郎 越智 宏暢 (同・核)
 山下 正人 (京府医大・放)

長期透析患者の合併症の一つである骨・関節へのアミロイド沈着が疑われる症例(透析アミロイドーシス)に対して、Floegeらにより考案された ^{131}I - β_2 -MGシンチグラフィを施行し、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMDPを用いた骨シンチグラフィとの比較検討を行った。対象は健常人と、透析アミロイドーシスが疑われる症例で、臨床症状として安静時の肩関節・手掌～手指の疼痛がみられ、正中神経の運動神経終末潜時を測ると著明に延長していた。HIV、HBs-Ag negativeの血液透析患者の血液より分離精製した β_2 -MGを用いた。クロラミンT法により、この β_2 -MG 150 μg に ^{131}I 370 MBqをラベルし、樹脂カラムを通してゲル濾過を行った。こうして得られた ^{131}I - β_2 -MG 37 MBqを静脈内投与し、3日目にガンマカメラにてスキャンした。これに先立ち、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMDP (740 MBq)を用いた骨シンチグラフィも施行した。 ^{131}I - β_2 -MGシンチグラフィの結果、正常例ではRIの関節への集積は認められず、一方患者例で両側肩・手・股・膝関節部にRIの集積が認められた。骨シンチグラフィでは、左肩関節および両側手・股関節部にRIの異常集積を認めるが、膝関節への高集積は認められなかった。以上の結果から、 ^{131}I - β_2 -MGシンチグラフィでは臨床所見に一致した部位にRIの集積が認められ、透析アミロイドーシスの診断法として特異性の高いものであることが確認された。なお、この血液透析患者の血液より分離精製された β_2 -MGを使用した ^{131}I - β_2 -MGシンチグラフィは本邦では初めての試みである。

21. 二次性副甲状腺機能亢進症における術後骨シンチグラフィの検討

藤井 広一 熊野 町子 大西 卓也
 東川 元紀 前西 修 松本富美子
 小野 幸彦 浜田 辰巳 石田 修
 (近畿大・放)
 柴 芳浩 竹田 照夫 (同・中放)

二次性副甲状腺機能亢進症における副甲状腺摘出術(以下PTX)前後の骨シンチグラムを、とくに頭蓋骨、顎骨に注目して視覚的に検討し、昨年の核医学会において報告したが、今回さらに経過を追って、症例を重ねて検討を加えた。

対象は、平成2年1月から4年4月までの2年間に、透析患者で二次性副甲状腺機能亢進症の診断のもとにPTXが施行された31例54骨シンチグラムで、頭蓋冠、顎骨への集積と他の部位への集積を視覚的に検討した。

PTX前骨シンチグラフィを施行した18例中、17例で頭蓋・顎骨への集積増加がみられた。このうち11例でPTX後7か月以内の骨シンチグラフィが施行され、頭蓋・顎骨への集積が改善4例、不変4例、増強3例であった。PTX後に初めて骨シンチグラフィを施行した13例中11例で、頭蓋・顎骨への集積が残存していた。これらは全例PTX後6か月以内の症例であった。PTX後骨シンチグラフィが2回施行された8例中6例で頭蓋・顎骨への集積の改善がみられた。一方、頭蓋・顎骨への集積と他の部位への集積の所見は、比較的同様の変化を示した。集積の改善が見られない例ではALPの低下が不良であった。

透析例における骨シンチグラフィによるPTXの効果判定には、注意深く経過を追っていく必要があると思われる。

22. 神経芽細胞腫における骨シンチグラフィについて

日野 恵 伊藤 秀臣 山口 晴司
 富永 悦二 川井 順一 今村 撰
 才木 康彦 中西 昌子 太田 圭子
 野沢 浩子 池窪 勝治

(神戸市立中央市民病院・核)

神経芽細胞腫は小児の悪性腫瘍のなかでも予後の悪い疾患のひとつであり、早期にリンパ節・骨および他臓器